

# マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 #20 原作シナリオ

山崎浩治

## マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 #20 原作シナリオ

---

### #1 廃線跡を歩くアヤカ

その思い詰めた表情。

雨の日も雪の日もアヤカが歩いている。

### #2 「居酒屋まわりみち」店内(夜)

オネエ所長と菜摘、サオリが来店している。客には美鈴とサトシがいる。

オネエ所長「アヤカ、どうしてるの？」

美鈴「トオルさんが亡くなってから大学もバイトも休んで、能登の廃線跡を歩いてるって」

オネエ所長「廃線跡……どうして」

サトシ「二人の思い出の場所みたい」

しんみりと黙り込む一同。

### #3 廃線跡を歩くアヤカ(別の日)

× ×

インサート・アヤカの回想(第15回)。

トオル「こうして廃線跡を歩いていたら、いつか親父が帰ってくるような気がしてね」

× ×

歩くアヤカ。廃線跡の向こうに、オネエ所長が立っている。

アヤカ「(気付いて)……」

オネエ所長「すっかり痩せちゃって。ちゃんと食べてる？」

### #4 廃線跡を歩くアヤカとオネエ所長

オネエ所長「あなたに渡したいものがあって来たの……(1枚の写真をアヤカに渡す)」

教育実習に赴いたトオルの写真。

オネエ所長のM「トオルちゃんが母校の高校へ教育実習に行った時の写真……よく見て」

### #5 写真のアップ

トオルと女子高生たちの背後に、陸上部のアヤカが走っている姿が写っている。

### #6 校舎2階にある教室(回想)

スーツ姿のトオルがグラウンドを黙々と走るアヤカを見つめている。

オネエ所長のM「トオルちゃんは昔から、ずっとアヤカのことを見てたのよ」

### #7 もとの廃線跡

写真を食い入るように見つめているアヤカ、必死に涙を堪えている。

アヤカのM「部活に夢中だったあたしはトオルさんのことを覚えていない……」

オネエ所長「アヤカはお通夜やお葬式でも泣かなかった。自分が泣いたらトオルちゃんが死んだって認めたことになると思ってるの？」

アヤカ「……」

オネエ所長「泣きたい時はちゃんと泣かなきゃダメよ」

アヤカ「(涙を堪えて)……」

## # 8 アヤカの実家(全景)

## # 9 アヤカの部屋

オネエ所長からもらった写真を見つめているアヤカ。そこにアヤカの父が入ってきた。

父「廃線跡に行くのはもうやめろ。そんなことしてもトオル君は戻ってこんぞ」

アヤカ「(拒絶している背中)……」

## # 10 「まわりみち」店内(別の日)

オネエ所長が菜摘やサオリを伴って入ってくると、店内には香澄や美鈴、あかり、吉岡がいた。

オネエ所長「みんな顔そろえてどうしたの？」

末吉「トオルちゃんをしのぶ会さ」

香澄「明日はトオルさんの四十九日だしね」

× ×

オネエ所長「(グラスを掲げて)……それじゃ献杯(と一同、献杯)」

美鈴「アヤカは廃線跡歩いてたらトオルさんと会えると思ってるわけ？」

オネエ所長「そういうこと」

あかり「相当参ってるみたいね、アヤカちゃん」

香澄「でも祈りが通じたら、奇跡が起こるかも……」

吉岡「よせよ香澄。ファンタジーの世界じゃあるまいし」

香澄「(寂しそうに微笑んで)そうね。現実にはファンタジーの世界じゃないわよね」

菜摘「お祈りしたら願い事は叶うって、ママが言ってたよ」

菜摘の言葉で遠い目になる店内の一同。

## # 11 「まわり道」表

一同の声「それじゃ、お休み(一同が外に出て来る)」

## # 12 ビルの屋上

香澄、夜空に向かって祈っている。

香澄「奇跡を起こしてあげて、凜。アヤカちゃんのために」

夜空に浮かぶ凜の顔。

### # 1 3 片町の裏通り

歩いてくる美鈴とあかり。美鈴が路地に入っていく。

あかり「どこ行くの、美鈴さん？」

美鈴「ちょっと野暮用」

路地の向こうに見える新天地地蔵尊。

美鈴とあかりが地蔵に祈っている。

### # 1 4 みんながアヤカとトオルのために祈っている

大ケヤキが立つ神明宮の境内で祈るオネエ所長、菜摘、サオリ。

尾山神社の境内で祈っている吉岡。

店の神棚に祈っている末吉。

アヤカの自宅では、アヤカの父が仏壇に祈っていた。

アヤカの父「アヤカにひとめトオル君を会わせてやってくれ……頼む、母さん」

### # 1 5 雨の中、廃線跡を歩くアヤカ

雨がやんで空の彼方に虹がかかった。

アヤカ「(空を見上げ)……あ、虹だ」

その時、背後から警笛の音。

アヤカ「(ハッと振り返り)……」

廃線跡の向こうから迫ってくる列車。

アヤカのところに来て停まる列車。扉が開き、降りてくるのは一トオル。

トオル「あっちの世界に行く前にアヤカちゃんと会えて良かったよ」

アヤカ「トオルさん！ どうして黙って行ってしまうんですか！」

トオル「ごめんね、アヤカちゃん。さよならを言えなくて。オレ、人生の最後にアヤカちゃんと出会えて幸せだった。ありがとう、そして、さよ……」

アヤカ「(遮って)さよならなんて聞きたくない！ どこにも行かないで、トオルさん！(涙があふれる)」

トオル「(そんなアヤカを万感の思いで抱きしめて)……」

アヤカ「(トオルの胸に顔を埋めて泣きじゃくり)どうして死んじゃったんですか。あたしたち、まだ何も始まっていないのに……」

トオル「オレの分もいっぱい生きて。約束だよ、アヤカちゃん」

発車ベルが鳴り響く。

トオル「もう行かなきゃ……(アヤカから離れ、列車に乗り込む)」

動き出す列車。

アヤカ「(必死に追って)トオルさん！」

車窓から身を乗り出して手を振るトオル。

トオル「アヤカちゃん、さよなら！」

列車を追って走るアヤカ、転びながら走る、走る。

虹のレールを走っていく列車が忽然と消えた。

アヤカ「(慟哭)」